

# 小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）

## 関連史料調査報告

— 於福井県福井市，小浜市

塩 崎 智

Report on a Survey of Historical Materials Related to  
Suzuhiko Tsukagoshi (1842-1886), an English Teacher  
Employed by Obama Domain,  
in Fukui Prefectural Library and Obama City Library

Satoshi SHIOZAKI

### 要 旨

1870年6月22日に横浜を出港したサンフランシスコ行きチャイナ号に、8人の日本人が乗船していた。本稿は、その中の1人の小浜藩士塚越酸素彦に関する、福井県福井市、同小浜市で行った史料調査の報告と、約40年前に発表された小浜藩の英学と塚越に関する先行研究の検証により構成されている。

調査報告の主な内容は、今回の調査で発見した塚越の伝記の内容の紹介と、小浜市立図書館に保管されている、酒井家文庫の英書に関する報告である。この英書の1冊に塚越が献呈した旨が自筆で書き込まれている。また、他の数冊にも、塚越あるいは同じ小浜藩の英語教師、星亨によると思われる書き込みがあり、これは写真付きで紹介している。塚越とこれらの書き込みに関しては、約40年前に現地を何度も訪問して行われた研究を発見した。今回の調査結果を基に、この先行研究の内容を検証した。なお、塚越個人に関する研究報告は、留学前と、留学後（帰国後を含む）に分けて、今後2回に渡り報告する予定である。

キーワード：小浜藩，酒井家文庫，横浜の英学，英学史

### はじめに

拙著前稿「明治初頭，日本人米国渡航者リスト解題・史料の補足」において、1870年6月22日横浜発，7月13日サンフランシスコ（以後SF）着のチャイナ号の日本人乗船客を採り上げた<sup>(1)</sup>。この船には8人の日本人が乗っており、彼等の名前は地元SF

の新聞と日本側の史料調査で明らかになった<sup>(2)</sup>。この1人である小浜藩士塚越酸素彦（1842-1886）に関する調査を，福井県立図書館・県文書館，福井県小浜市立図書館を2022年3月末に訪問して実施した。

最大の収穫は，塚越の伝記『金蘭簿物語』の発見である<sup>(3)</sup>。塚越の生涯に加え，著名な政治家星亨（1850-1901）との関係についても知ることができた。両者は横浜で偶然知り合い，小浜藩の英学教師として雇われ，江戸の小浜藩邸で藩士に英学を教えた後，小浜に転勤となった。

福井県立図書館で『金蘭簿物語』を閲覧した後，小浜市立図書館に移動した。同図書館には，小浜藩主酒井家が所蔵していた2万6,000冊の「酒井家文庫」と呼ばれる蔵書がある。そのリストの中に塚越の書き込みがある辞書を発見した<sup>(4)</sup>。他にも塚越の書き込みがある英書があるかもしれないので，塚越が横浜を発った1870年以前出版の英書の閲覧を事前にお願ひし実見することができた。

本稿では，まず塚越の伝記の内容をまとめ，星亨との関係も含めて，塚越の人生の概要を紹介する。次に，小浜市立図書館で閲覧することができた英書とその書き込みについて，田中洋による先行研究の内容の検証を試みる。

今回の論稿は，酒井家文庫の英書と塚越，星との関係についての記述が中心となる。後述するが，塚越は日本人米国渡航者の「留学生」と「労働移民」という枠組みのどちらにも当てはまらない渡米体験をしている。また，彼の留学前の江戸，横浜，小浜における体験は，幕末維新に英学と関わった様々な日本人の一例として大変興味深い。

塚越に関しては，伝記の記述内容を，これまでに蓄積された横浜英学史研究，星亨関係史料等を用いて吟味し，史実の抽出，仮説と今後の課題の提示等を2回に分けて発表する予定である。

本稿では原則として年号は西暦算用数字を使用し，史料の性質上必要な場合は，和暦漢数字を使用する。

本研究は，今から約40年前に出版された，池田哲郎『日本英学風土記』（篠崎書林，1979年）からそのアイデアを得ている<sup>(5)</sup>。筆者は，池田等が中心となって結成した日本英学史学会員として約20年間研究を続け2021年度をもって退会した。この学会の2022年初頭までの会長楠家重敏氏の宿願の一つに『日本英学風土記』等，学会の「至宝」とも言うべき出版物の加筆修正版の作成，発行があった。本稿は，研究者としての自分を育てていただいた日本英学史学会と，2022年1月に急死された楠家前会長への，ささやかであるが，身の程を知らぬ，報恩の試みでもある。

## 1. 酒井家文庫の現地調査の経緯

小浜市立図書館では、職員の方と塚越酸素彦に関する情報交換を行い、予約しておいた英書の閲覧、写真撮影等を行った。

小浜藩酒井家は、3代将軍家光の時代以来、大老、老中を輩出し、京都所司代を任された、譜代の名門藩である。小浜は京都の海の玄関口で、歴史的に京都と深い繋がりがあった。佐幕色濃厚の藩であったが、戊辰戦争では紆余曲折を経て新政府軍として出兵した。

小浜藩市役所職員で、酒井家文庫を管理され、小浜藩全般に詳しい川股寛享氏によると、戊辰戦争時に、脱藩した小浜藩士26名が浩気隊と名乗って幕府側についた。彼等は上野の彰義隊に加わり新政府軍と戦った。

塚越が渡米した、1870年6月22日発チャイナ号の日本人乗船客には、旧幕臣3人、戊辰戦争で新政府軍と戦った桑名藩士2人が「日本脱出」目的で乗船していた。塚越も同じ目的で、密出国的に国外逃亡したと推察した。酸素彦という名前も偽名に感じられた<sup>6)</sup>。この船には、当時、SFへの日本人出国の面倒を見ていたユージン・ヴァンリード (Eugene Miller Van Reed, 1835-1873) が乗船していた。塚越等日本人8人は、ヴァンリードに日本脱出を依頼した旧幕府関係者と考えた。

小浜市立図書館で、川股氏から浩気隊員のリストを見せていただいたが、塚越の名前はなかった。『金蘭簿物語』にも浩気隊に関する記述は無い。

小浜市でも、塚越は全く知られていない人物で、藩の史料の中で1,2か所その名前がでてきた程度である。伝記によると、塚越が小浜藩の英学教師として勤務したのは3年間ほどで、しかも小浜藩出身ではなかったということで、彼に関する現地の史料に限られているのはやむを得ない。今回の訪問では塚越の件を離れて、酒井家文庫の蔵書の豊かさに驚かされた。機会があれば、200冊あると言われる英書を全て閲覧したい思いに駆られた。

一連の情報交換の後、閲覧予約をしてあった酒井家文庫の英書を実見させていただいた。その結果については本稿後半で報告する。

## 2. 『金蘭簿物語』に見る塚越の人生

『金蘭簿物語』に綴られた塚越の生涯は以下の通りである。

1842年、今の群馬県太田市の平民の家に生まれた。塚越家は、元をたどれば新田義貞の家臣に遡り、本家の塚越家は地元の名家だった。それが奏功してか、塚越は1861

年に江戸に出て平民の身分でありながら昌平黌に入学し漢学を学ぶ。しかし，分家である実家が決して豊かではなかったため仕送りが途絶え，退学を余儀なくされた。在学期間は不明である。

塚越は太田に戻らなかった。医学と化学への関心が芽生え，江戸で職を転々と変えながら，書物を読み，学問修業をしていたようだ。

その後，医学修業の第一歩である英学の修業のために，1865年頃，横浜に移る。そこで，吉田橋の関門警備隊員をしながら横浜の外国人に英語を習った。星亨とは，この時期，近所の縁で知り合った。

1867年，横浜で小浜藩に英学教師として雇われ，士族となった塚越は1年間江戸の藩邸で英学教師を勤めた。塚越の斡旋により知人の星亨も英学教師として雇われた。1868年に，2人は小浜に呼ばれ藩士に英語を教授した。

1870年，塚越は小浜藩主に許可を得，渡航費等の初期費用を捻出してもらい，SFに単身で留学。学校には通わず，丸善の代理業等をして生活していたが，1873年に米国東部に移る。首都ワシントンの日本公使館で勤務した後，ニューヨークに移り，現地駐在で税務，財政調査中の若山儀一（1840-1891）に雇われた。同年9月に帰国，横浜税関に勤務したが，1886年に病死した。

横浜で出会った星亨との関係の理解を円滑にするため，主に田中洋の記述（「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」p.87）に依拠し，横浜出航までの，塚越と星の略歴を以下にまとめておく。

#### 【塚越と星の年表】（月名は，出典が陽暦使用史料の場合は，算用数字で記述）

1842年（天保十三年三月七日）

塚越，上野国新田郡太田町（現群馬県太田市）生 [平民]

1850年（嘉永三年）

星，江戸新橋八官町生 [平民]

1860年（万延元年）

星一家，横浜へ移住

1861年（文久元年）

塚越，江戸に出て昌平黌入学

星，横浜の蘭医渡辺貞庵に弟子入り

1864年（元治元年）

星，横浜英学所に学ぶ

1865年（慶應元年）

塚越，横浜に吉田橋関門の警備隊員勤務の傍ら，外国人から英語を学ぶ

1866年（慶應二年夏）

星，横浜を去り，江戸牛込の幕臣小泉家の養子となり幕府洋式散兵隊に編入。前島密に英学を学ぶ〔士族〕

1867年（慶應三年春）

星，前島の世話で開成所英語世話役心得となり，軍事教練を免除

八月，前島が兵庫に移り，星，何礼之に英学を学び，海軍伝習所生徒英語世話役となる

九月，塚越，江戸小浜藩雇英学教師となり江戸牛込矢来の藩邸で勤務〔士族〕

十二月，星，海軍伝習所廃止で失業，横浜に戻り，塚原周造宅で共同生活を営む。また塚原の後継者として「万国新聞」の翻訳を担当

1868年（明治元年二月）

星，小浜藩に英学教師として雇われ，塚越とともに，江戸牛込矢来の藩邸で勤務

1868年（明治元年八月）

塚越，星とともに小浜に移り英学教師として勤務

1869年（明治二年九月頃）

星，小浜を去り大坂へ移る。星側史料によれば塚越同行

1870年（明治三年）6月

塚越，横浜からSFへ向け出航

### 3. 先行研究：田中洋の一連の研究（1976年-1984年）

『金蘭簿物語』が非売品だったこともあり，出版された後も，特に塚越が歴史的に注目されたことはなかったが，インターネット上で，塚越を扱った先行研究を発見した。福井県小浜市から鉄道で西に向かうと京都府舞鶴市がある。同市にある舞鶴工業高等専門学校の紀要に，塚越酸素彦と，小浜市立図書館保管の酒井家文庫所蔵の英書に関する計5本の論文が発表されている。著者はいずれも同校の人文科学科教授田中洋で，諸論文の発表年と論題は以下の通りである<sup>(7)</sup>。

1976年3月「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」

1977年3月「同上 その2（読本類）」

1978年3月「同上 その3（文法及び雑）」

1980年3月「小浜の英学」

1984年3月「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」

最初の3本は酒井家文庫の英書に関する調査報告で，4本目は酒井家文庫と，小浜藩の蘭学から英学への変化を結び付けようとした労作である。最後の「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」では、『金蘭簿物語』に書かれた塚越の生涯をまとめ，酒井家文庫の英書への書き込みと塚越の関係について述べている。この点は大変重要であるので本稿で詳細に考察する。

田中は星の伝記にも目を通し，星の伝記との相違点も指摘している。田中の研究では，星亨に関する情報は，有泉の『星亨』からの引用のみである。今後の研究で，塚越に関係がある星亨関連史料の検証も可能な限り実施したい。

田中の最後の発表後，小浜藩酒井家文庫の管理と整理に長年携わっていた，元小浜市立図書館長の小畑昭八郎と，福井県お雇い外国人のグリフィス研究で知られる，福井県在住の英学史研究者，山下英一も『金蘭簿物語』と塚越に言及している<sup>(8)</sup>。小畑，山下の記述によれば，小浜藩は医学校の開校を考え，そのために英学者が必要となり塚越を雇用したという。幕末維新期の英学と医学という興味深いテーマである。

#### 4. 酒井家文庫の英書の調査

##### (1) 英語辞書類

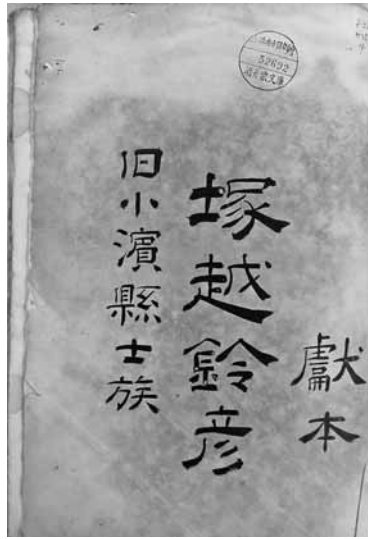
今回の小浜市立図書館訪問の主な目的は，塚越の書き込みがある，4巻本の『英華字典』*An English and Chinese Dictionary*, by W. Lobscheid, Hong Kong, Daily Press, 1866-1869 を実見することだった。

本書は幕末から明治にかけて，漢文の読み書きができた日本人に大変重宝された<sup>(9)</sup>。第1巻1866年，第2巻1867年，第3巻1868年，第4巻1869年出版となっている。辞書の購入は，1巻ずつでも4巻セットでも可能だった。香港では定価が4巻セットで30ドル，1冊ずつだと1冊7.50ドルだった。当時，外国から輸入された辞書は大変高価で，日本では個人では手が届かず，藩が購入した可能性が高い。塚越が4巻揃いで入手したとすると，1869年以降の購入なので，小浜で英語を教えていた時代である。

塚越は1865年から横浜で生活していたが，職業は吉田橋の関門の警備員で，小浜藩に英学教師として雇われた時（1867年）は五人扶持で，1869年には七人扶持となった。小浜市立図書館所蔵の「明治三年分限名前帳」には，「洋学司 四十石 役料三人口 塚越 酸素彦」と記録されている。士族としては少禄の部類である。独身で，出費を切り詰めていたとしても，『英華字典』4巻本の個人での購入は難しかっただろう。この入手経路は興味深い謎である。旧小浜県と書いてあるが，小浜県は1871年末には敦賀県となるので，塚越が留学から帰国後に酒井家に寄贈したことになる。

実物を手に取って見たところ，塚越の書き込みがあるのは，第4巻だけで他の3冊に

写真1 『英華辞典』の塚越による書き込み（筆者撮影）



は、書き込みは無かった（写真1参照）。

酒井家文庫には、塚越渡米以前に出版された、英語の辞書がもう2冊ある。1冊はヘボンの有名な『和英語林集成』*A Japanese and English Dictionary with an English and Japanese Index*, by J. C. Hepburn, Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 1867である。これも大変高価な辞書で、日本で入手できたのは1867年以降ということになる。書き込みは一切無い。

もう1冊は、これも有名なウェブスターの辞書で、*An American Dictionary of the English Language*, by Noah Webster, Springfield, George and Charles Merriam, 1864である。日本で入手できたのは、1864年以降であり、これも書き込みは無い。ヘボンとウェブスターの辞書も、塚越個人ではなく、小浜藩が購入した可能性が高い。

酒井家文庫の本には様々な種類の蔵書印が押されている。この蔵書印が、その書籍が小浜藩に入手された時期を知る一つのヒントになる。田中の論考にはそれぞれの辞書の蔵書印が示されていて参考になるが、蔵書印が歴史的に何を意味するかは詳細が不明である。田中は蔵書印に着目していたが、英書の出版年には留意していなかったようだ。本研究は、出版年を重視し、蔵書印は状況に応じて副次的に使用することとした<sup>(10)</sup>。

塚越との関係はさておき、英学との関わりが全く知られていなかった小浜藩に、幕末の三大輸入辞書とも言うべきこの3冊が所蔵されていたことは何を意味するのだろうか。田中洋「小浜の英学」によると、酒井家文庫には、堀達之助編・堀越亀之助改訂『改正増補英和对訳袖珍辞書』（江戸開成所、慶應二年あるいは三年）と、*Military Dictionary*, by H. L. Scott, New York, Trubner, 1864といった辞書もある（p. 108）。後者の軍事辞典の購入理由は、1869年の小浜藩の英式兵制導入と関係があるのだろうか。塚



越の『英華字典』との関わりとともに，興味深い謎である。

## (2) リーダー（Reader）とその書き込み

この辞書群の次に英学史的に重要なのは，リーダーと呼ばれる，英文読解のテキストブックである。今回の訪問で，発行年が1870年以前の以下のリーダーを閲覧した。

*The Standard First Reader, for Beginners*, by Epes Sargent, Boston, John L. Shorey, 1866

*The Standard First Reader, for Beginners* by Epes Sargent, Boston, John L. Shorey, 1869

*The Standard Third Reader*, by Epes Sargent, Boston, John L. Shorey, 1869

*The First Reader of the School and Family Series*, by Marcius Wilson, NY, Harper & Brothers, 1860

*First Reading Book*, by E. A. Sheldon, NY, Charles Scribner, 1867

最初の3冊は，幕末に慶應義塾等，日本でもよく使われたリーダーである。1stから5thの5段階あり，1stが入門レベルとなる。酒井家文庫には2ndも所蔵されているが，1870年以降の出版年だったので今回は閲覧申請をしなかった。4冊目は，通称ウィルソン・リーダーとしてよく知られている。5冊目の*1st Reading Book*の著者であるシェエルドン（E. A. Sheldon, 1832-1897）は，ウィルソン（Marcius Wilson, 1813-1905）と並んで，ペスタロッチの実物主義教育の米国における先駆者として知られている<sup>(1)</sup>。

ウィルソン・リーダーには，「勉学所 第九号」の書き込みがあった。勉学所に関しては情報が無い。第九号というのは教科書の通し番号のことだろうか。1860年出版のこの本が，藩校等の学校で教科書として使われていて，学生に貸し出した際の番号かもしれない。リーダーで，現時点で最も興味深い点は，その内容よりも，むしろこのような書き込みである。

サージェントの1stリーダー1866年版の，表紙の裏の見開きの左右の頁に，鉛筆のような物を使った，アルファベットの小文字の筆記体の練習の書き込みがある（写真2参照）。右頁には， $15:18=x:450$ という計算式が書かれ，左下の方には，同じ式の和算のような式も見える。初心者用の1stリーダーにアルファベットの練習が書き込んであるのは分かるが，なぜ，数学の方程式が書き込んであるのだろうか。同一人物が英語の初歩と数学を同時に学んでいたことを示唆している。

幕末維新期の日本における，英書による数学指導に関しては，専門家に当たる必要がある。例えば，横浜英学所では，1864年頃から宣教師タムソンが数学を教えている。



写真2 1st リーダー 1866年版表紙の裏 見開き右頁 (筆者撮影)

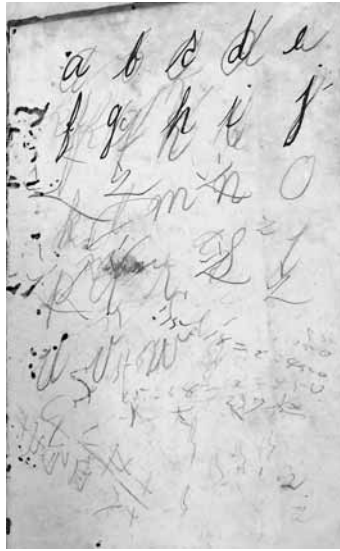


写真3 *New Elementary Algebra* (川股氏撮影)



使用していた教科書名は不明である。1865年2月24日タムソン筆の書簡では、算数を学ぶ生徒は英語よりはるかに少なく10人程度だったという<sup>(12)</sup>。この1stリーダーは1866年出版であるので、1866年冬の横浜の大火で消失した横浜英学所で使用された可能性は低い。

田中洋「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」によると、*New Elementary Algebra Embracing the first principles of the science* by C. Davies, New York, 1863にも書き込みがある (p.79)。筆者は未見であったので、書き込みの写真をデータで送っていただ

いた（写真3参照）。こちらは裏表紙左頁に，読み易い筆記体で，Tska Koshi と書いてあるので，田中の解読通りに塚越と読める。彼の所有だったことは間違いはない。右頁には「デヴィス 算術書」と筆で書かれている。これに関しては，1863年版であるので，塚越が横浜時代かそれ以降に使っていた可能性がある。『金蘭簿物語』では，塚越が化学と医学に関心を持っていたことが再三強調されている。塚越の理数系志向の現れを証明する英書となる可能性がある。

塚越が，いつこの「算術書」を使用していたかは定かではない。1863年出版であるので，彼が1865年から1867年までの横浜滞在時代に使っていたことも考えられる。今後の課題としては，先述の1stリーダーに書き込んであった $15:18=x:450$ という計算式がこの「算術書」にでていのかどうか等の確認をする必要がある。この式が使われていれば，1866年版の1stリーダーと1863年版の「算術書」は塚越が使用していた可能性が高まる。

書き込みが最も興味深いのは，3rdリーダーの1869年版である（写真4参照）。これについては，まず田中洋の最後の論稿（1984年）である「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」の冒頭部分を引用する（p.79）。

「Science strengthens, enlarges the mind と The Standard 3rd Reader にかきこみがある。小浜市立図書館蔵の英書の一冊の中にある。一体，だれがこういった言葉をかきのこしたのであろうか。小浜の英書に出会ってから長年，頭にあったものである。

この本には，更に，Thompson, Ballagh, Hepburn 等の名がある。表紙のうらに，This books belong to T. S. とある。また，別の一冊 New Elementary Algebra には Tska Koshi のサインがある。こういったかきこみに解答を幸運にも与えてくれた本がある。金蘭簿物語（塚越丘二郎述，昭和2年同勞舎刊）である。以下，この本に従って，このかきこみの人物，はたまた，小浜英学とのかかわり合いを解明していこうとするものである。」（p.79）

田中は，この7年前の1977年に発表した「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究（その2）（読本類）」で，この3rdリーダーの書き込みについて，既にやや詳しく触れているが，この書き込みの主が塚越であるという発見にまだ至っていなかった。「この本全体を通じて，学習者は非常に丹念に辞書をひき，かきこみをしている。このことは，最初の Lesson から最後の Lesson まで，徹底しておこなわれているのが驚きである。」と述べ，「このテキストは軍務所の指導教官のものであるか。学生のうちで優秀なものが，進んで学習したからであろうとも考えられる。」（p.199）と推測している。軍務所

は、1869年に小浜藩が設置した、英式兵制を司る部署である<sup>(13)</sup>。

その後、田中は酒井家文庫の『金蘭簿物語』に出会い、この書き込みの主を塚越と考えた。

サージェントの3rdリーダーは、筆者も小浜市立図書館で実物を閲覧した。田中の調査によると、この本は2冊あり、筆者が閲覧した本には、何の書き込みもなかった。小浜市立図書館の川股氏に、もう1冊の当該箇所の写真を撮影して送っていただき、後日、確認することができた<sup>(14)</sup>。

筆者は、川股氏から送られた書き込みの写真（写真4）を実見し、次のように書き込みを読み取った。

#### ■左頁

- 左端の中段よりやや上辺りに、**星**と漢字で書かれている。
- **Thompson** が横書きで3段、筆記体で書かれている。その下に **Ballagh** が1段筆記体で書かれている。2段目の **Thompson** の左の方に **to** が見える。
- **Ballagh** の下の段に、**This book belong to H.** と筆記体で書かれている。
- その下に **Thompson** が2段、筆記体で書かれている。
- その下の段に **Hepburn** が1段、筆記体で書かれている。
- その下はかなり薄い字で **Ballagh** と筆記体で書かれている。
- 右端に、縦書きで、3つ **Ballagh** の名前が筆記体で書かれているが、最後の **h** の文字が抜けているように見える。

#### ■右頁

- ほぼ中央やや左寄りに**星**と漢字で書かれている。
- 上段に4段に分けて、**Science strengthens and enlarge the mind. Therefore I must study delight** と書かれている。最後の **delight** は筆者による推測である。
- その下の段に、やや薄く **I must study diligent** と書かれている。最後の **diligent** は筆者による推測である。
- その下の段に **Then**（推測）**this reader belong to Hoshi Towl** と書かれている。
- 最下段左に、一番大きな字で、**Hoshi** と書かれている。

以上から明らかのように、これは塚越ではなく星亨の書き込みである。左右の頁に書かれた漢字の**星**は決定的だろう。田中もこの**星**の漢字は見たはずだが、塚越を意識しすぎたのか、言及していない。筆記体のアルファベットの解読には不明な点が多々あり、

写真4 3rd リーダー 1869年版（川股氏撮影）



田中の指摘も理解できるが、筆記体の頭文字同士を比べてみると、星のHはヘボンのHと同じ筆記体であり **Koshi** ではなく **Hoshi** と読める。

次にタムソン，バラ，ヘボンである。この3人はいずれも横浜英学所の米国人教員で，塚越と星が横浜にいた1865，1866年は同校で教えていた。同校ではブラウンも教えていたのだが，ブラウンの名前は書き込みに無い。その理由は二つ考えられる。ブラウンは1865年3月から長崎出張で2か月間横浜を離れたので，その間はヘボンが代講していた。1866年9月には，ブラウン等宣教師達は，横浜英学所の教職を辞した。つまり，1865年3月から5月の間と，1866年9月以降は横浜英学所では誰もブラウンに習っていなかった。もう一つの可能性は，ブラウンは最上級クラスで教えていたので，ブラウンには習っていない，中級か下級の生徒の書き込みということである<sup>(15)</sup>。

星は，横浜英学所の下級クラスで学んでいた。ブラウンに習っていない可能性が高い<sup>(16)</sup>。横浜英学所で使用されていたとされるテキストにはサージェントの1stリーダーと2ndリーダーはあるが，3rdリーダーに関しては不明である<sup>(17)</sup>。

もう1点付け加えると，田中は指摘していないが，この多くの書き込みがある3rdリーダーの出版年は1869年である。塚越と星が横浜で英語を学んでいた1865年，1866年には1869年版はまだ出版されていない。塚越は1869年に小浜で英学指導をしており，星も1869年の秋には小浜を出て大坂に移っていた。つまり，塚越，星のどちらにしても，この書き込みは横浜でなされたものではない。横浜での英学生時代ではなく，小浜での英学教師時代の書き込みということになる。

左頁の書き込みをよく見ると、タムソンの前に小文字の to が見える。つまり、これは星が小浜で指導用に使っていた教科書で、タムソン、バラ、ヘボンへのお礼の手紙を書く練習をしていたのではないか。

タイミング的には、1870年6月に横浜を出航して渡米した塚越が、かつて横浜英学所で英語を指導してくれた3人に、お礼の意味で惜別の手紙を書く練習をしていたとも考えられる。当時はまだ紙が貴重だったので、テキストの裏表紙等を使っていたのだろうか。

田中が推察した、3rdリーダーの書き込みの塚越筆説は完全には無視できない。その際に超えるべきハードルは二つある。まずは、漢字の星の書き込みをどう解釈するかである。もう一つは、塚越が横浜英学所で学ぶことができた可能性である。

横浜英学所に関する先行研究を調査したところ、警備員でも、学ぶことができた可能性に言及している論考は1本あり、頼まれれば誰にでも教えた、という談話もある<sup>(18)</sup>。平民身分だった塚越は横浜英学所に入学できず、3人の宣教師に、横浜英学所と同じテキストを使って個人指導を受けたという可能性もある。神奈川奉行に関する史料は大半が消失、焼却され、横浜英学所で学んでいた学生のリストも現存していない。塚越の横浜英学所との関係と、書き込みの詳細な解読と史料としての活用については、然るべき史料の発掘を待ち、今後の課題としたい。

### (3) そのほかの英書

サージェントの3rdリーダーについての記述が長くなった。筆者が閲覧した、これ以外の英語教育で使用されたと思われるテキストブックは以下の通りである。

*An Attempt to Simplify English Grammar*, by Robert Sullivan, Dublin, M. & J.

Sullivan, 18th edition, 1868

*English Grammar, on the Productive System*, by Roswell C. Smith. Philadelphia,

E. H. Butler & Co., 1867

*The Standard Grammatical Spelling-Book*, by Henry Combes and Edwin Hines,

London, Longmans, 1867

これらは、いずれも英文法に関するテキストブックである。書き込みは全く無かった。いずれも1867年、1868年の出版であるので、日本で入手されたのは、早ければ維新の初頭と思われる。塚越が使用したとすると、江戸の小浜藩邸時代か、小浜時代ということになる。

英学関連書以外に、閲覧した英書は以下の書物である。

*First Book on Civil Government*, by Andrew W. Young, NY., Clark & Maynard,  
1869

書き込みは無い。塚越が小浜を去る前に購入された可能性が高いが，小浜藩が本書を購入した理由は兵制改革に伴う一連の行政改革の必要性だろうか。

*Natural Philosophy Part First for Children*, by Mary A. Swift, 1867

*Natural Philosophy Part Second for Children*, by Mary A. Swift, 1866 Hartford,  
William J. Hamersley, Publisher. Philadelphia J. R. Lippincott & co.

表紙が和綴じになっていて『理学初歩』と訳題がついている。発行地は YEDO。『理学初歩 乾』（Lesson 1-15）『理学初歩 坤』（Lesson 16-）の 2 冊分冊になっている。塚越の所有であれば，塚越の理科志向を示唆する史料になるが，所有者を示唆する書き込みは無い。

本書については，藤田豊「蘭学・英学物理書接点——理学初歩」という論考がある。開成所で使われた他に，大野，福山，松山，佐倉等の藩校でも使用されていた。幕末，知識人の中で自然科学への関心が一般化していたことを示しているという。一八六七年版と一八六八年版がある。

今回の調査で閲覧した英書は以上であるが，書き込み以外にも興味深い情報がある。1st リーダー 1866 年版と，*English Grammar, on the Productive System*, by Roswell C. Smith. Philadelphia, E. H. Butler & Co., 1867 の 2 冊には，「外国本屋薬種屋道具屋横浜本町通八十四番ハルトリー，並ニ江戸大阪商売仕候」という書店印が押してある。

ハルトリー（John Hartley）はイギリス人で，1864 年に薬剤師として横浜に来日した。翌年，独立して薬品・書籍の輸入業を営み，さらに東京の築地居留地，大坂の川口居留地にも商館を構えた。初期の東京大学に数多く洋書教科書を納入した<sup>(19)</sup>。想像をたくましくすれば，医学，科学に関心があり，米国渡航後，SF で英書取引に関わっていた塚越との関係も考えられなくはない。

## おわりに

本稿では，筆者が福井県福井市，同小浜市で行った実地調査の結果と，その後発見した，主に田中洋の先行研究を紹介した。酒井家文庫の英書への書き込みに関しては田中が先行研究でかなりの紙幅をさいて触れていたもので，田中の見解と筆者の調査結果を比較検証し，その結果についても記述した。



筆者の見解によれば、酒井家文庫の数冊の英書にみられる書き込みは、塚越によるものもあれば、星によるものもある。英書の出版年を考慮すると、その時期はおそらく塚越と星が英学教師として、小浜で活動していた1869年頃である可能性が高い。それらの書き込みから読み取れる史実に関しては、広範な背景史料を調査し、今後の検討課題としたい。

「はじめに」でも触れたように、本稿は一連の塚越酸素彦研究の「序論」とも言うべきものである。今後、『金蘭簿物語』の記述を、江戸居住時代、横浜居住時代、小浜藩英学教師時代、留学時代（カリフォルニアと東部）等に分け、他史料、豊富な先行研究の成果を援用し、ファクト・チェック、仮説や今後の課題の提示を2回に分けて行う。

『金蘭簿物語』は塚越の人生を詳細に語っている伝記ではない。収録された一次史料は大変貴重な史料であるが、その史料の背景が不明なものも少なくない。著者である次男の丘二郎が4歳の時に酸素彦は病死しているため、著者による父親の思い出は皆無に近い。第三者による記述に近いが、丘次郎の亡父に対する思い入れが強く記述は主観性が高い。

今後の研究はすでに進めているが、塚越酸素彦はなかなか手ごわい研究対象である。江戸、横浜、小浜、SF、ニューヨークと、行動範囲が広く、塚越が興味を持った範囲も医学、化学、貿易と幅広い。

最後に、塚越を研究する意義を明らかにしておきたい。塚越は上州出身の平民だが、読書好き（学問好き）で、江戸では昌平黌で学び、横浜で英学を学び始め2年後には小浜藩雇いの英学教師として迎えられ士族となった。「大出世」である。しかも、その小浜藩の英学教師という身分を捨て、1870年6月、ほぼ自費で明確な計画も無く、単独で米国へ留学する。チャイナ号に同船していた、桑名藩や幕臣出身者のような国外逃亡的渡米では無い。カリフォルニアでは、他の自費留学生のように苦学した形跡はあまり無く、逆に在米日本人の面倒を見ていた、という。東部に移動後も、持病のリューマチに苦しみなながらも、知的職業についている。

幕末維新期の米国日本人留学生としては、今までに見られないタイプである。さらに塚越が「大出世」を果たした横浜時代も、横浜英学史研究に新たな光を当てる可能性がある。これまで横浜英学史は、ヘボンやブラウン等、著名な宣教師に学び、後年歴史に名を残した「明治の偉人」研究が中心だったという印象がある<sup>(20)</sup>。塚越は、横浜時代の本職は、吉田橋の関門の警備員であり、帰国後は横浜税関勤務の1官僚に過ぎない。

幕末維新期に英学志望で横浜に集まってきた日本人は、塚越や星のような平民あるいは幕臣以外の士族、維新後であれば脱走幕臣、といった下層ヒエラルキーの人物もいた。彼らと、宣教師も含めた横浜在住外国人とが織りなす、幕末維新期の横浜英学の実相は大変興味深い。



福井県図書館・文書館，小浜市役所の酒井家文庫担当の職員の方々，舞鶴高等専門学校の図書館職員の方々，貴重な『酒井家文庫綜合目録』を長期間に渡り拝読させていただいた福井県北越市の山下英一先生，横浜在住宣教師に関する貴重な情報を提供していただいた中島耕二先生には，特に大変お世話になり，この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

《注》

- (1) 『拓殖大学人文科学研究紀要 人文・自然・人間科学研究』（47号，2022年3月）pp. 177-214。
- (2) 同上，pp. 193-202。
- (3) 福井県立図書館，県文書館に塚越の調査依頼をしたところ，職員の長野栄俊氏から，塚越は塚越鈴彦という名前であることを教わり，次男の塚越丘二郎が執筆した『金蘭簿物語』（1929年出版）を紹介された。長野氏からは，塚越に言及した論文，山下英一「グリフィスとその時代——一八九〇—一九〇〇年代の日本——」（『若越郷土研究』，45巻1号，2000年，pp. 1-13）も御教示いただいた。

『金蘭簿物語』によると，塚越酸素彦は『金蘭簿』という「渡米前後の生活を簡単に記したノート」を残していた。この内容を基に，次男の丘二郎が，肉親，塚越の知人の談話，残された書簡，書類の内容等をまとめて記述した伝記が『金蘭簿物語』である。

著者塚越丘二郎が執筆に使用した史料との照合作業が必要であるが，太田市立図書館，太田市教育委員会文化財課に問い合わせたところ，当該原史料の所蔵場所は確認できていない。塚越家が所蔵している可能性が高いが未調査である。

本書は，東京都の同労社印刷の非売品である。国外ではベルリン国立図書館も所蔵している。筆者が知る限り，『金蘭簿物語』を研究史料として活用，引用しているのは，有泉貞夫『星亨』（朝日新聞社，1983年）のみである。
- (4) 小浜市立図書館編『酒井家文庫綜合目録』（小浜市立図書館，1987年），p. 288に，書き込みが転記されている。
- (5) 『日本英学風土記』は，著者池田が全国の都道府県を回り，各都道府県の図書館等が所蔵している英学史関連一次史料を調査し，その結果についてまとめた労作である。インターネットが無い時代に，多くの貴重な史料を足で集め得た事に驚かされる。ちなみに，福井県の項（pp. 302-326）では小浜藩の英学については触れていない。著名な蘭学者杉田玄白（1733-1817）と中川淳庵（1739-1786）が小浜藩医であること，幕末に福井・小浜藩が蕃書調所に市川斉宮（1818-1899）と杉田成郷（1817-1859）を訳員として派遣したことに触れているのみである（p. 302）。
- (6) 塚越は，良之介，酸素彦，鈴彦と名前を変えている。海外移住150周年研究プロジェクトの調査結果（『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』，彩流社，2019年）によると，海外旅券勘合簿神奈川県之部と於開港場免状相渡候航海人明細鑑に，明治三年の箇所「鈴彦」という名前が記載されている。リストのすぐ後に，同じ便に乗船した旧桑名藩士の高木貞作と山脇正勝（多藝誠輔）の「貞作」，「誠輔」が続くので，ほぼ間違いなく塚越酸素彦（鈴彦）だろう。『金蘭簿物語』（p. 4）に，酸素彦から鈴彦への漢字の変更は「鈴彦（明治三年，洋航に差掛る不都合に付止む無き事）」と書かれている。それぞれの記述は以下の通りである。
  - ・「海外旅券勘合簿神奈川県之部：免状番号 319，29歳。出身地は横浜北仲通四丁目森兵衛店，身分・職業は高橋屋小兵衛弟，渡航理由は米国商人ゴブル小仕としてサンフランシスコへ。」（史・資料 p. 98）

- ・「於開港場免状相渡候航海人明細鑑：出身地は横浜北仲通四丁目嘉兵衛店高橋ヤ、身分・職業は小房弟、渡航理由は米人ゴブル小仕ニ被雇、発行日は庚午五月二十三日、返納年月は（明治）6年10月4日、年齢31。」（史・資料 p.110）

年齢等、細かな点で相違はあるが、両方とも米人ゴブル小仕という点では一致している。ゴブルに関しては未調査である。

- (7) 田中は地の利を活かし、少なくとも8年越しで小浜市立図書館を訪問し、史料をじっくり何度も閲覧することができた。その論稿には、原史料に直に何度も接することができた研究者ならではの厚みと深みがある。「小浜の英学」の最後に、次のように田中は記している。「小浜市立図書館所蔵の英書に出会ってからすでに数年がたった。約200冊の英書があるというだけで、それらが語りかけているものが、何であるのか年を経るごとによやくわかってきた。」（p.110）

- (8) 小畑の「酒井家文庫目録編集あれこれ（第一回）」は、『若越郷土研究』32巻4号、1987年、pp.53-59）に、山下の「グリフィスとその時代——一八九〇——一九〇〇年代の日本——」（同45巻1号、2000年、pp.1-13）に掲載されている。酒井家文庫の経緯に関しては、小畑昭八郎「酒井家文庫の成立について」（小浜市立図書館『酒井家文庫総合目録』小浜市立図書館、1987年）pp.5-10を参照。

酒井家文庫は、1941年に旧小浜藩主酒井家から小浜町に寄贈された。蔵書は東京の酒井家から小浜城内の裁判所内にあった旧雲浜図書館に運ばれた。その後、戦火を避けるため、あるいはその他の理由により、転々としたが、最後は旧小浜町立図書館に納められた。

約2万6千冊の本の中には、由来と内容が異なる蔵書群があるが、今回の研究と関係が深いのは藩校の旧蔵本である。江戸藩邸にあった3つの藩校と小浜の順造館の蔵書である。それらが藩校別ではなく合体した形となって保存、管理されている。

- (9) 『英華辞典』に関しては、茂住實男「中国語を媒介にした英学研究」『大倉山論集』と、宮田和子『英華辞典の総合的研究 19世紀を中心として』を参照した。宮田によると、この辞書は「中国語あるいは英語の学習者と、商業関係者を対象とする」辞書だった（pp.108-109）。現在、4点セット以外も含めて、日本国内に76部の所在が確認されている（p.244）。

漢文の素養があった当時の日本人には大変好評だったようで、これを原著とする和刻本が、明治になってからも、2種類出版された。中村敬宇『英華和訳事典』（1879-1881）と、井上哲次郎『増訂英華辞典』（1883-1885）である。

- (10) 『酒井家文庫総合目録』のp.145以降に、付録二として印記集が色刷りで掲載されている。田中洋「小浜の英学」には「印影による英書分類」という節がある（pp.107-108）。田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」には、蔵書印の種類として、軍務所、小浜学校、酒井家、遠敷雲浜図書館、敦賀第五大区小学校、敦賀第七大区小学校が挙げられている（p.152）。数的検証はしていないが、1870年以前出版の英書は「軍務所」の蔵書印が多い印象を受ける。星が1869年、塚越が1870年に小浜を去った後、彼らが小浜藩に残した英書が、1869年に設立された軍務所に保管されたのではないだろうか。

- (11) 西本喜久子「19世紀アメリカにおける『ウィルソン・リーダー』の革新的要素と位置づけ——『マクガフィー・リーダー』との比較を中心に——」pp.131-133。

- (12) 中島耕二編『タムソン書簡集』p.38。

- (13) 田中洋「小浜の英学」pp.104-108。田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」によると、田中は、この軍務所の印章について防衛庁図書室、戦史室に調査を依頼した。陸軍奉行の管轄にあった出先行政機関ではないか、という返事を受け取ったという（p.153）。

- (14) 書き込みを実見、撮影していただいた川股氏によると、書き込みは、薄い下書きをペンでなぞっているように見える。そして、この下書きは鉛筆のように見えるという。

- (15) 誰がどのクラスを担当したかに関しては、公の史料があるわけではない。各宣教師の書簡の内容等が根拠となっている。
- (16) 小玉晃一，敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』（笠間書院，1979年）p.37に、星は下級クラスだったと書かれている。出典は三宅秀の回顧談である（福田雅代『桔梗—三宅秀とその周辺』p.280）。この三宅の発言に依ると、最上級クラスの学生として、三宅秀，矢田部良吉，大鳥圭介，古屋作左衛門，藤倉健達，塚原周造の名前が挙げられている。
- (17) 横浜英学所でテキストとして使われた本と酒井家文庫の英書を比較しておく。塚越か星が横浜英学所で使用したテキストが、小浜に残されているかどうかを確認することが目的である。前出，小玉，pp.63-64を参照した。

横浜英学所では、サージェント・リーダーは1stと2ndが使われていたが、3rdに関しては史料に記されていない。田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究（その2）（読本類）」によると、小浜市立図書館には、1stは1866年版が5冊，1869年版が1冊，出版年無しが5冊，計11冊，2ndは1872年版が計8冊，3rdは1869年版が2冊所蔵されている。1stの1866年版は別として，出版年から判断すると，1865，1866年に横浜英学所で使われていたものでは無さそうだ。横浜英学所で使われていたとされるウェブスターの『スペリング・ブック』が，出版年は異なるものの，小浜にあるNoah Webster, *The Elementary Spelling Book*, New York, Appleton & Co. 1886と同一かどうかは不明である。横浜英学所で使われていたことが分かっている、『ステップ・バイ・ステップ』（初級編）と，ミッチェルの地理書は原書名が確認できていない。ブラウンが著し，上級クラスで使用したという『日英会話編』*Colloquial Japanese*は小浜には無い。塚越か星が横浜英学所で1865，1866年に使用した本が小浜に持ち込まれたケースは，あったとしてもごく少数と言えそうだ。横浜英学所が各クラスで使用したテキストの正式名称等の，より正確な情報を待ちたい。

- (18) 本稿注(15)参照。榎田益美「横浜開港場における英語教育——ヘボンを介して開設した「横浜英学所」（『郷土神奈川』，55号）は特にこの点について触れていない。茂住實男「横浜英学所（中）」（『大倉山論集』30号）では，ブラウンが1863年8月25日付けの書簡で，2人の大名子弟に英語を指導している例を挙げている。神奈川奉行は，江戸の開成所で幕臣以外の入学を認めていることを理由に，横浜英学所でも幕臣以外の自費入学を許可する願いを幕府に出している。これに対する幕府の返事は見当たらない。しかし，幕府は，幕臣以外にも，神奈川奉行所通弁，同所詰通詞に個人的に英語を学ぶことは許可している（pp.76-77）。

小玉晃一，敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』では，星亨のような平民の例の他に，安藤太郎（1846-1924，鳥羽藩医の息子，幕臣）の1863年の例を引用している。「英学の先生は暁の星ほどもない。こっちは習いたいが，一途で方々を探すと，横浜に米国人が4人いて親切に教えてくれるとの話，行暮れた旅人が燈火を見つけたかのよう，さっそく出掛けた。（中略，鳥羽藩士の息子の安藤が吉田橋関門を苦勞して通る話が書かれている）そこでいまの税関や県庁のあるあたりには，運上所と称えたもので，そこへ米国人を尋ねると，見る影もなき長屋に4人が棲んでいて，破れ畳の上で教えている。もともと耶蘇教伝道の目的で渡来したもので，それには語学の教授をもって青年を手馴づけるのが早道であると，門を訪ずるものは喜んでこれを迎え，無月謝同様の厚遇をした。その先生がヘボン君・バラ君・タムソン君・ブラウン君でヘボン君はいまに壮健でいられる。（中略）当時わたくしどもの仲間には大鳥圭介・星亨・沼間守一・益田孝・林薫・三宅秀それに先年鎌倉で溺死した田中館理学博士ら，いわゆる後年の名士がいた。」（pp.57-58，原典は『横浜どんたく』上巻）。

- (19) <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai2005/tenji/index-f.html> (2022年8月19日最終閲覧)
- (20) 横浜在住宣教師に詳しい中島耕二氏から，横浜英学所で学んだ学生について以下のようなご教示をいただいた。

「幕政中に横浜に集まった英学志望者は、ヘボン塾、タムソン塾や横浜英学所に限定しても、林董、佐藤百太郎、三宅秀、高橋是清、鈴木知雄、沼間守一、早矢仕有的、益田孝、益田克徳、大槻文彦、安藤太郎、大鳥圭介、矢田部良吉、塚原周造、乙骨謙三、田中館愛橘、高松凌雲等が確認され、維新後にあっては、旧幕臣や佐幕系士族（上級武士から下級武士）のほか、前田利嗣、松平定敬、松平定教、大関増勤など旧大名の海外留学準備組が高島学校や横浜修文館で学んでいます。」

## 参考文献

### ● 基調文献（重要度順）

- ・塚越丘二郎『金蘭簿物語』（著者発行、1929年）。
- ・田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」（『舞鶴高等専門学校紀要』11号、1976年3月）pp.152-163。
- ・同「同上 その2（読本類）」（『舞鶴高等専門学校紀要』12号、1977年3月）pp.197-202。
- ・同「同上 その3（文法及び雑）」（『舞鶴高等専門学校紀要』13号、1978年3月）pp.150-161。
- ・同「小浜の英学」（『舞鶴高等専門学校紀要』15号、1980年3月）pp.100-122。
- ・同「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」（『舞鶴高等専門学校紀要』19号、1984年3月）pp.79-87。
- ・小浜市立図書館編『酒井家文庫綜合目録』（小浜市立図書館、1987年）。
- ・有泉貞夫『星亨』（朝日評伝選27、朝日新聞社、1983年）。
- ・野沢鷄一編著、川崎勝、広瀬順皓校注『星亨とその時代1』（東洋文庫437、平凡社、1984年）。

### ● その他の文献

- ・小畑昭八郎「酒井家文庫目録編集あれこれ（第一回）」（『若越郷土研究』32巻4号、1987年7月）pp.53-59。
- ・海外移住150周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』（彩流社、2019年）。
- ・小玉晃一、敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』（笠間書院、1979年）。
- ・権田益美「幕末期から明治初期の横浜開港場における英語の学習——林薫一族を事例に——」（『港湾経済研究』50号、2011年）pp.139-148。
- ・同「横浜開港場における英語教育——ヘボンを介して開設した「横浜英学所」」（『郷土神奈川』55号、2017年）pp.16-32。
- ・酒井シズ「良斎と秀」（福田雅代『桔梗——三宅秀とその周辺』、1985年）pp.20-33。
- ・中島耕二「宣教師デビット・タムソンの生涯——誕生から日本基督一致教会の創立までを中心として——」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』35号、2002年）pp.225-275。
- ・中島耕二編、日本基督教団新栄教会タムソン書簡集編集委員会訳『タムソン書簡集』（教文館、2022年）。
- ・西本喜久子「19世紀アメリカにおける『ウィルソン・リーダー』の革新的要素と位置づけ——『マクガフィー・リーダーとの比較を中心に——』（『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』56号、2007年）pp.131-140。
- ・藩政史料調査会「小浜藩酒井家史料の調査」（『史学雑誌/史学会 編』66号、1957年2月）pp.154-161。
- ・藤田豊「蘭学・英学物理書接点——理学初歩」（『英学史研究』17号、1985年）pp.19-26。
- ・宮田和子『英華辞典の総合的研究 19世紀を中心として』（白帝社、2010年）。
- ・茂住實男「中国語を媒介にした英学研究」（『大倉山論集』27号、1990年3月）pp.301-321。

- 同「横浜英学所（上）」（『大倉山論集』29号，1991年3月）pp.235-268。
- 同「横浜英学所（中）」（『大倉山論集』30号，1991年12月）pp.59-90。
- 同「横浜英学所（下）」（『大倉山論集』32号，1992年12月）pp.125-165。
- 山下英一「グリフィスとその時代——一八九〇—一九〇〇年代の日本——」（『若越郷土研究』45巻1号，2000年）pp.1-13。

\* 本稿で使用した写真は，すべて小浜市（酒井家文庫・小浜市所蔵）の撮影と掲載の許可を得ている。

（原稿受付 2022年6月22日）